あとがき

松田　亮三

『インクルーシブ社会研究』の８号は、2015年１月に行われた人間科学研究所年次総会の記録を収めています。３回目を迎えた研究所の総会は、今回も全所的プロジェクトの公開研究会を兼ねて開催されました。また、研究所の多様な研究活動の交流を図る場として、ポスター・セッションもこれまで同様実施されました。

今回の総会の特徴は、文部科学省からの助成を受け、研究所を母体として立命館大学が取り組んでいる研究プロジェクト「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」において予見的支援・伴走的支援・修復的支援に係る研究を推進している３チームが、それぞれ報告セッションを企画運営したことです。そのため、これまでは半日のプログラムでしたが、今回は１日のプログラムとして開催されました。

それぞれのチームの企画のあり方は、それぞれの＜学＝実＞連環のあり方を反映しているようで、内容はもとより、方法論的な意味でも、大変意義深い研究報告・交流の場となったように思われます。学際的に組織されている人間科学研究所では、対人支援はもとより人間科学にかかわる幅広い研究が推進されています。その意味で、本報告書に掲載されている企画は、プロジェクトの推進のみならず研究所の今後の研究活動を探っていくうえでも貴重なものでした。

国境と文化を超える支援研究のあり方について、研究チームそれぞれの経験を受けて検討された全体企画、若手・ベテラン研究者を交えて熱心な議論が行われたポスター・セッションも、＜学＝実＞連環のさまざまな側面を考える上で、興味深いものでした。どちらも、もう少し時間があればという思いを残すものとなり、もどかしい思いが残ったかもしれません。この報告書の出版が、そうした思いをすくい上げるとともに、支援についての＜学＝実＞連環研究のさらなる展開につながっていくことを願っております。

終わってみればたった１日のことですが、この総会・公開研究会の準備と運営には、研究プロジェクトに関連した研究者と実践家のみなさん、ご参加いただいたみなさん、研究所事務局スタッフの有形・無形のご協力のあってのことです。最後になりましたが、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

＜以上＞

※本冊子記載の所属は総会開催当時の表記に統一しております。